



駈け足

香山健児九十余名
力強き足音

村積の峰にこだまし
今 大地を蹴る

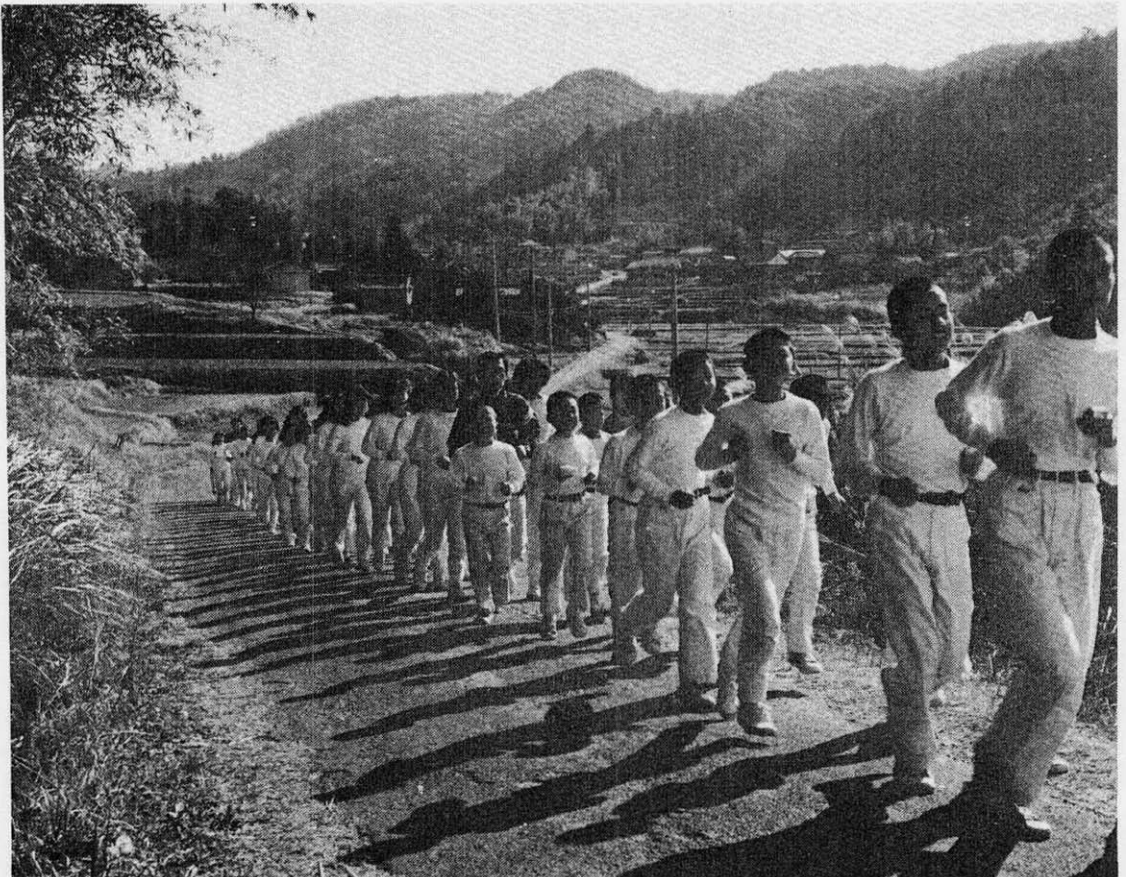
凛烈の大気 はだをさし
霜畦に息白く

秀気の中
今心魂をみがく

たくましき身体鍛え
やりとげる根性をはぐくみ

若人の胸に
今命息吹く

昭和54年2月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会



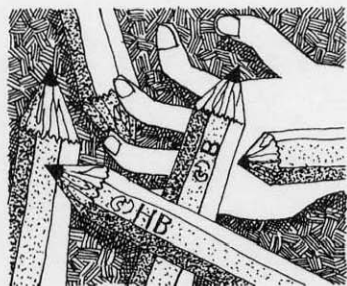
(冬の日ざしの中を走る—香山中)

—教育随想—

尾鷲の自然は大きい

その自然保護策を考える

大原準之助



昨夏「尾鷲の自然を守る会」という団体から、私も所属している全面的なシダ研究団体「日本シダの会」及び私が主催している「愛知植物研究会」に対しましてに不可解な申入れがあった。

その地形と特異な気候条件のため屋久島とともにシダ植物の宝庫であり、シダ研究のメッカであることは、つとに海外にも知られる当地であるが、近年貴重なシダが絶滅に傾いているのは両会員による採集のためと考えるから今後一切会員の来鷲を禁ずるといふものであった。

何らかの誤解によるものと思われるが学問研究のほか自然保護をモットーとする私達には迷或至極であった。

これに対し日本シダの会々長の倉田吾東大教授がある雑誌に反論を載せられている。その要旨は、尾鷲のシダが貴重なことは論を俟たないが特に規制すべき貴重種は何々かを公表すべきである。

外来の研究者なので地元の方ではない。近年も何回となく訪れるが重要は産地のシダは必ずしも減ってはおらずかえって新分布すら発見された。一方開発が急速に進み山肌の裸出する所が多くなつた。自然を守る会の組織・性格も不明で、この申入れは果たして市民の声を真に代表しているものだろうか。自然保護はもつと大らかに自然を相手に皆で考えるべきではないか等々であった。

いちいちもつともなご意見で、私の思ひもほぼこれに近い。自然保護教育及び植物学研究上考えなければならぬことが多いようだ。学問特に植物の種類や分布のような分野では、一握りの学者・研究家だけでは到底研究が進むものではなく、少しでも関心と興味をもつ一般の方々の協力が絶対に必要である。よく言われるように、底辺が広く厚いほど学問の成果が挙がるのは当然であろう。

しかし、一部の研究者や自然保護学者の中には貴重な種類やその分布を一切公

表すべきでないとする論者がある。大きさに言えば「よろしむべし・知らしむべからず」という方が自然保護の理にかなう。

「植物採集などもつての他だ」と、イギリス等、過去の徹底した自然破壊により植物相が一変した国の厳しい規制を例にとられるのである。

尾鷲の場合、実態把握もせず、裏面だけのそれをまねた極端な例であり、一種の地域エゴ的な面もあるが、そもそもこのような態度は植物学の発展を阻害するばかりか本当の自然保護からも遠いものである。

私は常々自然保護教育は「よろしむべからず、知らしむべし」と考えている。万人に広く自然保護を訴えるには、迂遠でも自然の実態をよく把握してもらうことが先決であろう。

私達の身のまわりで、どんな動植物がどのような生活していて、我々の生活とどのような関わりを持っているかを本当に理解すれば、無意味な乱獲や自然破壊に手を貸すことは恥ずかしいと思うはずである。

規制無用を説くのではない。自然に対し何が大切な、何をしてはならぬかは一種の狭であると考えればよい。その根底は、心からの納得と愛情である。

このような自然保護教育が徹底すれば尾鷲のようなお互いの不幸も起り得ないし公害や開発に対する国民の考え方もおのずから正されると思うことである。

(県自然環境保全審議会専門委員)



私の三組

石川守彦

六年担任中で最も若い私は、一つだけ秀でることが出来る組作りを目指して四月に出発した。

春・秋の運動会と夏の水泳大会は、どれも最下位で走る。

「だめか。では勉強で……」

毎朝三十分間費やして漢字・計算・文章題のショートテストで鍛えた結果が、二学期末の試験で隣の組より二十点悪い平均点が出た。

「だめか。では行いで……」

始業時に本と帳面の準備ができていないと罰、便所のスリッパが整っていないと罰、ぬか袋で廊下を磨き上げようと提案したが、罰の遂行に大忙し。

「だめか。では団結で……」

子どもの提出した日記を綴った通信が百号を越すのに、日記を書く子も増えないし毎日教室のくすにも出る。

「だめか。では……」

そんな時、体育の授業で丁が骨を折って入院した。その見難いに行くと、廊下



岡崎の地下構造

東海大地震の話題が日に日に高まっている昨今である。もし、岡崎市が巨大地震に見舞われたらどうなるであろうか。地震の被害は、地震の大きさだけでなく、その種類や地盤の構造に大きく左右される。関東大震災時には沖積平野の下町に被害が集中していたというし、新潟地震でも信濃川の沖積地の被害が特にひどかった。しかし、昭和二十年の三河地震、先頃の伊豆地震では、堅い岩盤の

所で家屋の倒壊がひどかったという。巨大地震と直下型地震のゆれの違いである。ところで、岡崎の地下の構造はどうなっているだろうか。岡崎市の地質を簡単に図であらわすには、かたかなの「レ」の字で岡崎市の地図を三分すればよい。矢作川に沿って、まず、まっすぐ下に福岡町まで書き下し、ここから須渕まで一気にはねあげる。「レ」の字にはさまれた部分は主として岡崎石と呼ばれる花崗岩、その右下が領家片麻岩、いずれも生成してから一億年近く経た堅い岩盤である。昔から「岡崎は地下が一枚岩盤だから、大きな地震が来てもゆれが少ない」と言われるが、この岩盤の上なら、巨大地震にも安全かも知れない。これは、ほんの少しの振動にも計器が狂う分子研で先生方にゆれの少なさについて折り紙をもらったほどである。

さて、問題は「レ」より左の部分の、新しい地層で被われた部分である。岡崎市は地形図で見ると、もの見事に南北の一直線を境にして平野と山地とに分れている。濃尾・三河平野の東端である。その西端は養老山脈で、よく知られた断層山脈である。西端ほどはないにしても、その下にはかなりの落差の断層がかくされていても不思議ではない。

事実、広幡小学校付近で地表面近くにある花崗岩の基盤が、連尺小学校では地下二十メートルにあり、矢作橋では、六十メートル以上も深くになっている。そして、その間は新しく堆積した砂礫や泥土で埋められている。また、この直線をまっすぐ南にはばすと深溝断層（三河地震の時の活断層）に達するものも気がかりである。おそらく地下には何本かの、新しい時代に動いた新層がかくされていると思われる。

断層と言え、岡崎では御油断層谷が有名である。名鉄電車に沿った谷を断層をさがし廻ったことがある。けっきょくかなり南に二本の断層帯を発見することができた。本宿のグリーンランド（造成団地）から東海中学校裏を通り山中小へぬけ、竜泉寺山に達する、新第三紀層（数千万年前の地層）を切る大断層であった。写真は本宿グリーンランド造成団地で、中央の凹地、その二本の断層に挟まれている部分である。ひよっとすると、現在でもまだ活動しているかも知れない。

岡崎で、巨大地震に見まれた時最も危険な箇所は、何と言っても矢作川の沖積地である。六ツ美地区では、新しい軟弱層が地下四十メートル近くも埋積しており、大きな地震で流動性のある泥土と化して、いわゆる流砂現象をひきおこしやすい。

しかし、岩盤の上だからといって、安心はしておれない。巨大地震を引き金にして、過去の古きずである断層が、もし活動したら、三河地震の時のように、倒壊率九十パーセントという大破壊もおきかねない。常日頃の用心が大切だと思ふ。世なおし世なおし。

（六名小 竹内昭次）

で花束や菓子をぶらさげた三人の男子が面会を待っていた。うれしかった。冬、こんな私の三組ができた。

M君の大時計

（矢北小）

岡本知子

「今日は千メートル競走をします。タイムも計るからがんばりなさい。」

準備体操、トラック一周のランニング。「男子Aチーム位置について、用意ドン。」ドンと同時にストップウォッチを押し。「O君ががんばれ、遅れるな。」

肥満児のOは、半周の差がつき女の子から声援を受けている。

「あと一周だぞ、がんばれよ。」

「先生、今何分。」

Mに聞かれて時計を見る。あつ、しまった。止まっている。

「先生、ネジを忘れたのだら。」

「どうしよう。O君たちに悪いな。」

あと半周でゴールイン、泣けそうだ。「先生いいよ、ぼくが時計見といたで。ドンの時が十時五十七分だったな。」

「よしあれから三分。」

「K君、三分三十秒。」

「S君、三分三十八秒。」

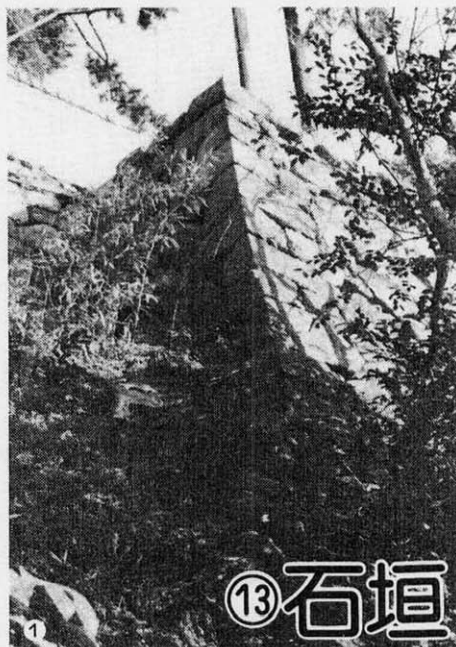
校舎の大時計を見てMが言う。

助かった。役に立つ子だな。やれやれと心の中でMに手を合わせた。

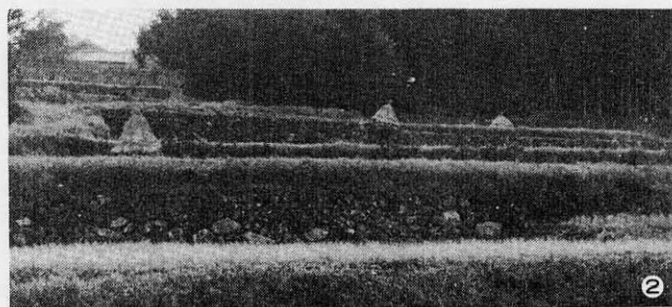
この子たちともあとわずかでお別れだ。なんだかさみしい。

（連尺小）

岡崎再見



⑬ 石垣



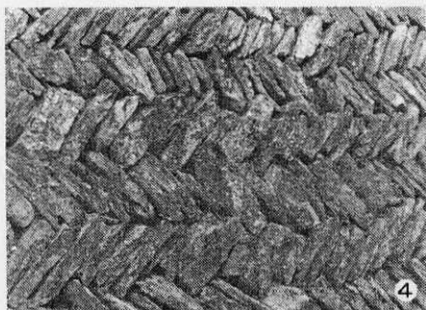
「鶉巢」という山村にふさわしい名前の部落を通り抜けて、山道（と言っても車一台は通れるのだから感じは出ないが）を入れて行くと、「徒然草」の「神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、…」という一節が、ふと口をついて出た。

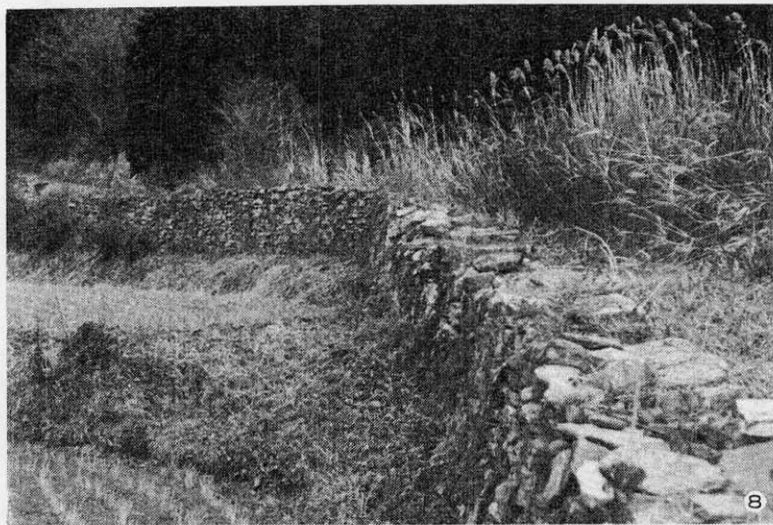
猪垣は、山裾を取り巻くようにうねうねと沢の奥に延びていた。小さな田んぼを仕切る畦道を渡って近づくと、なんの変哲もない平べったい石が胸のあたりまで積み上げてある。雑草や

細い木が石の透間に根を張って、百五十年余という猪垣の歴史を物語っている。天辺に昇ってみると、山側は意外に深く落ち込んでおり、猪を防ぐ垣の役目を果たすに十分であった。

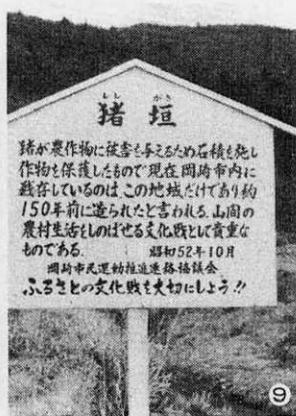
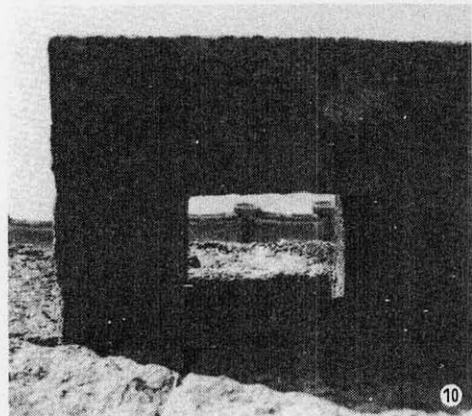
風雪や天災をくぐり抜けて、今日まで小揺ぎもせずに残っている猪垣を、目で、手で、足で確かめてみると、人間の営みの永さ、奥深さ、確かさを感じずにはいられなかった。

石垣を求めて、野山に、川っ淵に、露地に立って見たが、そこで見たものは、人々の生活と結びついて息づいている石垣の姿であった。

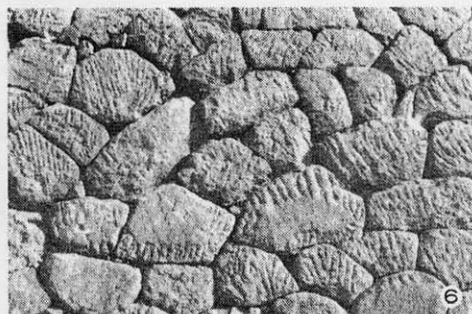
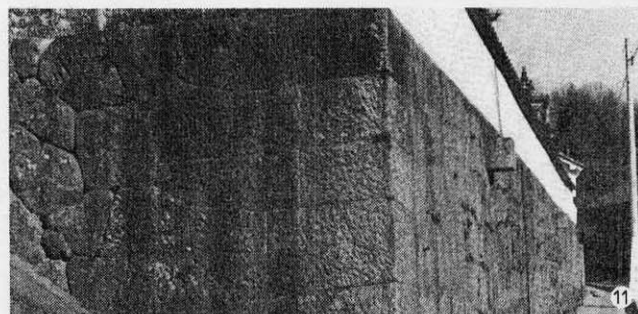




- ① 五万石岡崎城の石垣
- ② 一段一段、積みあげ奥へ開いていった山田の石垣（才栗町・下秦梨）
- ③ 山すそにへばりついて建つ、民家の石垣（山網町）
- ④ なめ石（片麻岩）を組む（鶴巣町）
- ⑤ 河原の栗石を組む（秦梨小学校）
- ⑥ 土の中から堀り出した玉石を、細工して組む（能見、不動尊）



- ⑦ 刃物のはいるすきまもないほど密に組みあげた味噌屋の石垣、横ずれのないように波形に細工してある（八帖町）
- ⑧ しし垣（鶴巣町）
- ⑩ これは何でしょう。解答はオアシスで信者の石工が心を込めて積み上げたのだからか（滝町、弘願寺）
- ⑫ この石の階段をおりて、野菜を洗い、洗たくをする（高隆寺門前）



教育日々



S子とシマリス

山中小 河合澄江

「先生、シマリスのこと作文に書いてきてもいい。」

「いいよ。何でも。」

「あのね。私のシマリスが逃げちゃったの。それで、どうしても書きたいの。」

「ふうん。書いといでよ。そして、朝トレで発表したらどう。」

「あれは、もうぜつたいに忘れられない。シマリスがにげた九月二十三日。わたしと、おねえちゃんとないてしまった九月二十三日。今でも、わたしは（リリー、どうしているかな）」と、そうぞうしながら思っている。

と、いう書き出しでこの作文は始まっている。そして、「ひまわりのたねをジャラ、ジャラと入れるその時、リリーが鼻先で



戸をあけてしまったのです。

「……『おかあさん、リリーがにげちゃった。』と大声でいうと、おねえちゃんまで、『どうした。』リリーがにげちゃった。」ときつきと同じようにいった。……

……あみがあいているとも知らず、おねえちゃんにわたしたのがいけなかった。……あみで、サツとしばふの上をよこにやると、あなのあいていることを知っていたのか、サツとにげた。

と、決定的瞬間を描写している。S子は、決して作文の得意な子でも大好きな子でもない。

その子が、自分から進んで書いてきたのだ。初め原稿用紙三枚に書いて出し、書き直すから

と言って持ち帰り、再び持ってきた時は五枚になっていた。逃げ出したシマリスが忘れられなくて、シマリスに対するけつ別のつもりで、作文に書いたのであろう。

「リリーは、雨でびしょぬれになりながら、『さあ、どこにげようかな』ときよろきよろしていた。一度、ビタツと止まってわたしたちを見たけど、にげていってしまった。……わたしは、いつまでも、いつまでもリリーを忘れられない。」

こう結ばれているS子の作文をさっそく、朝のトレーニングタイムに発表させた。

「よく書けている。Sちゃんの気持ちがよくわかるよ。」

友だちの感想に、S子は、はずかしそうにほほえんでいた。

ビデオ教材作り

福岡小 江坂良夫

「五・四・三・二・一・スタート。」

二学期もおしせまった深夜、機嫌をそこねたビデオ編集機を相手に、ビデオ教材作りに悪戦苦闘をした。

今年度、視聴覚部自作委員会では、三年生の郷土読本の中か

ら、「駒立のぶどう作り」「米作り」「とん屋」「地形もけい作り」それに、五年生を対象にした「味噌作り」さらに、八ミリで大門の「しめなわ」の合計六本の作品を作ることになった。そのうちの「とん屋」を私が作ることにしたのである。

四月の主任会で、大役をおおせつかつて以来、何から手をつけていいやら、いまままでに一度もこのようなことの経験のない私にとっては、すべてが頭痛の種であった。解からないながらも、手さぐり状態で、まず、資料集めとコンテ作りを行った。

それができ上がると、今度は録画撮りである。夏休みには、大きなカメラのケースをかかえ、問屋団地まで出かけ、要領を得ない機械を相手に四苦八苦した。ひとしおむし暑さを感じる一日であった。翌日は、配達の場面の収録ということで、わざわざ足助の小売店まで出かけ、

意気揚々と引きあげてきたが、いざ再生をしてみるとカラー調整の失敗で使いものにならないことがわかり、折角の間屋の好意も水の泡となったのである。

こうしたいろいろな失敗はあったが、ともかく教材作りに必要な画面を撮り終え、何とか夏

休み中に編集まで終えようとしたが、半ばまでしかできず、そのつけが、年末にまわつてきてしまったのである。夜遅くまであちこちの学校の放送室を借りて編集の仕上げを急いだが、編集機が変わるたびに映像が乱れ、それこそもうやめようという程度も思った。

それだけに、十二月三十日、音声が入り、完成した時は、何とも言えぬ気分であった。一緒に協力して下さった先生方に感謝するのみである。

この教材が子供達の前に何度も登場してくれるならば、苦勞が報われるというものである。





第30回 岡崎市民駅伝

寒風を突いて健闘を繰り広げる

去る一月十四日・恒例の岡崎市民駅伝が、市マラソンコースで実施された。

参加チーム・中学校34チーム・一般高校26チーム・熱戦が続き、成績は次の通り。

△中学校の部(六位まで)

- 一位 岩津中A 49分5秒
- 二位 福岡中A 49分22秒
- 三位 城北中A 50分0秒
- 四位 甲山中A 50分4秒
- 五位 矢作中A 50分15秒
- 六位 東海中A 50分26秒

△区間賞

- 一区 常盤中A柴田真人 二
- 区 岩津中A平石博和 三区
- 岩津中A日比誠路 四区 常盤中A榑原鉄也 五区 城北中A直井達也 六区 岩津中A鈴木敏治 七区 岩津中A堀成

【寄贈研究物・資料等】

- ◇昭和53年度研究のまとめ 県小中学校事務職員研究会 県事務職員組織のな研究報告書・B5判・一八七頁
- ◇中学生のための音楽教室感想文集 岡崎青年会議所 市民音楽の夕べ・中学生音楽

教室十回記念中学生感想文集。B5判・一九頁

◇本との対話3 美川中学校 石の上にも三年・美川中学校の教師読書感想文第三集。新書判八一頁

◇小・中学生理科の研究第19集 現職教育理科部

- 水沢伝(岩小)、佐藤裕(広幡小) 筒木栄子(広幡小)、中根洋(矢北小) 柴田秀夫(梅園小)、佐々木俊輔(根石小)、深津万里子(右津小)、山田賢平(三島小)、山本繁子(愛宕小)、白井正壯(愛宕小)、鴨下智幸(美川中)、平岩浩文(美川中)、柴田九二男(美川中)、野沢知子(福岡中)、中村敏(葵中)

■海外研修報告会の開催

一月二十七日(土)岡崎市民会館(一号会議室)で、三河・岡崎地区合同の海外研修者の報告会が開催された。

海外研修報告書の配布に続いて、次の方々が生々しい海外研修の成果を発表された。

▽三河関係

- ・アメリカ東部 伊藤迪治(岡崎高校)・東南アジア 菟田晃(蒲郡北小)・永田正男(蒲郡西小)・アメリカ 塩谷鉄治

▽岡崎関係

- ・アメリカ・カナダ班 藤井智雄(梅園小)・千田水城(東

海中)・ヨーロッパ班 後藤章(広幡小) 古橋睦典(井田小) 東南アジア班 大河原隆(電海中)、牧内映雄(福岡中)

■一月・二月の研究発表校

- ▽藤川小研究発表会1月26日
 - ・主題 子どもの中の学校図書
 - 館 社会科の学習を通して 講話 全国学校図書協会研究第一部長 黒沢浩氏
- ▽大樹寺小研究発表会2月9日
 - ・主題 書きながら学ぶ子ども

書きぞめ展

各学級で育った児童作品を展示します。ぜひご覧ください。印刷料もましますお願ひ申し上げます。

日時 昭和54年1月17日(水) 21日(日) 午前10時～午後5時

会場 岡崎市立美術館

主催 岡崎市教育委員会 岡崎市現職教育委員会等

昭和54年度 研究発表校の研究動向

子 定 日	研 究 テ ー マ	発 表 校
5月29日	確かな観察と豊かな表現 —国語・理科・音楽を通して—	竜美丘小
6月 日	学 習 指 導 法	葵 中
7月10日	自ら学び、自ら汗する 112	河 合 中
9月25日	国語学習における基本的な能力の育成	本 宿 小
10月19日	活力ある城南児童像を求めて	城 南 小
10月30日	よりよい価値意識に高める道徳指導	六ツ美中小
11月 6日	一人一人を生かす指導の探究	香 山 中
11月16日	考える子どもを育てる算数指導	矢 作 東 小
12月 7日	自ら調べ磨き合い生きる学習	細 川 小
1月28日	健康で情操豊かな児童の育成	岡 崎 小

を育てる—国算社理の四教科を通して、講話「ことばと日本文化」京都大学教授、多田道太郎氏

▽秦梨小研究発表会2月23日

- ・主題 自己管理をめざす健康教育—保健・体力づくり・給食を通して。

穴 観 音



所在地—岡崎市吹矢町

岡崎は、牛若丸と浄瑠璃姫の
 悲恋を描いた「浄瑠璃姫物語」
 の舞台であるだけに、姫に関係
 のあるといわれる寺や、史跡・
 遺物が極めて多い。

市役所前の菅生川にかかる吹
 矢橋を渡りきった西側の吹矢公
 園には、前愛知学芸大学長故内
 藤卯三郎先生の「散る花も流れ
 によとむ姫が淵」の句碑が建つ。
 この句碑のすぐ下あたりが、
 牛若丸を慕う姫が身を投げて短
 かい生涯を終えたという浄瑠璃

ヶ淵である。そして、その淵の
 すぐ上に、姫が投身の際隠れて
 身仕度をしたといわれる窪み
 がある。洞の奥には、後日、姫を
 哀れんで観音の石像を安置した
 のでこの名がある。

なお、このあたりは今では護
 岸工事のため水勢が変わって、
 川の深さはみられないが、その
 昔は見るさえずこい紺青の水面
 であったという。
 ここに立つと、哀れな姫の恋
 の終わりが川面に感じられる。

●カット

梅園小

早川 正春

この本を

- 日本人の言語生活 金田一春彦
 講談社 ￥790
- 習俗の社会学 加藤秀俊
 PHP研究所 ￥980
- レトリック感覚 佐藤信夫
 講談社 ￥980
- 私の読んだ本 松田道雄
 岩波書店 ￥280
- 異本論 外山滋比古
 みすず書房 ￥1,100
- たいまつ十六年 むのたけじ
 理論社 ￥1,500
- 北京の旅 陳 舜臣
 平凡社 ￥1,700
- ロンドンからの手紙 青木利夫
 朝日新聞社 ￥820
- 問題解決の原理と方法 佐藤 勇
 初教出版 ￥950
- 中学二年以後 望月一宏
 中公新書 ￥380

おお寒、小寒。
 空には、冬將軍が、これでもか、これ
 でもかと荒れ廻っているが、畑の日だま
 りには、もう、春の来るのを待ちかねた
 雑草たちが花をつけはじめている。
 イヌフグリやハコベの可憐な花は雪の
 中を走りまわって遊ぶ一年坊主みたい
 だ。梅のたよりはまだまだだろうか。

シオ スア

猪垣を写そうと本宿で一号线と別
 かれ、大幡町から山の中へ入ること
 数キロ。山すそと田の間に、高さ一米余
 の石垣が延々と連なる。農作物を猪の害
 から防ぐための農民の汗の結晶。万里の
 長城のミニ版といえよう。
 石を積んで石垣を作る。ものをいわな
 いはずの石に妙に人間臭さを感じた。

アングルを変えて新しい視角でものを
 見ると、今までの感覚と大いに異なる何
 とも奇妙なものに出くわす。
 未来都市ブラジリアか古代遺跡のよう
 に見える五ページの写真⑩も、よく見る
 と瓦が見え、石垣の一部とわかる。
 これは⑩の弘願寺の石垣の排水口で
 飛沫を防ぐ先人の智慧である。

水仙の香やこぼれても雪の上
 千代女
 厳冬のころ百花にさきがけて咲く水仙
 は、「魁の花」として、多くの人々に親
 しまれている。
 雑然とした机上の一輪ざしに水仙が冬
 の陽を受けて淡く光っている。春の訪れ
 を待つかのよう。